

* 関係論: [さうありがたい自己(△粹)⇒手本(C・C')⇒願望(D1)⇒言葉(F:願望的諸概念)⇒型(E)にしたがつた行動⇒模倣(D2)⇒それに辻褄を合はせようとする(生甲斐・居心地の良さ・自己満足D3)]

《『批評家の手帖』P81。より》以下文、「」内が恒存文。()内は吉野注。

* 「人はなにも立派な行爲や幸福な生活だけを真似たがりはいしない。墮落すればしたで、不幸になればなつたで、それぞれの型(E)を真似よう(演戯)として、歴史(C時間的全體)のなかに、周囲(C'場)に物語や劇や小説(C'場)に、それ(型E)を探し求めるであらうし、自分が下した自己解釋(かう描かれないと言ふ意識・願望=場面C'から生ずる心の動き=関係D1)を模倣(「型Eにしたがつた行動」・演戯D2、即ちボヴァリズム)し、それに辻褄を合はせようとする(生甲斐=居心地の良さ=自己満足D3)であらう」。・・・とは、以下の関係論圖を物語つてゐるのではなからうか。

手本: C(神・歴史=時間的全體・自然=空間的全體)・C'(場)・・・歴史(C時間的全體)のなかに、周囲(C'場)に物語や劇や小説(C'場)に、それを探し求める(場面C'の設定=手本)。

* D1(関係:願望・實在物)・・・「自分が下した自己解釋」(かう描かれないと言ふ意識・願望=場面C'から生ずる心の動きD1)。
* 「いやしくも世に『存在する』と言ひうるものはそれ(関係:D1)だけである。それなら、**在るものは関係だけである**」(P23)。

F(言葉:潜在物)。

* 自己解釋(かう描かれないと言ふ意識・願望)で作つた言葉(F)、即ち**願望(D1自己解釋)**に該當する言葉(F)。

* 願望(D1自己解釋)的諸概念(F)・・・歴史的英雄・幸不幸の主人公・悲喜劇の主人公・墮落の主人公、等々。

E型(潜在物Fの裏に實在物D1を際立たせる型・Fの「so called」でD1を見せる)・・・* 「人はなにも立派な行爲や幸福な生活だけを真似たがりはいしない。墮落すればしたで、不幸になればなつたで、それぞれの**型(E)**を真似ようとして、歴史(C時間的全體)のなかに、周囲(C'場)にそれ(**型E**)を探し求める」。・・・とは、「型(E)にしたがつた行動」(演戯)で真似ると言ふ事では？つまり換言すれば、「手本(C・C')⇒**願望(D1自己解釋)**」に該當する言葉(F願望的諸概念)と、それ(F)に附き合ふ(E)に最適な**フレイジング(Eの至大化)**=「**型(E)にしたがつた行動**」を探し當てる、と言ふ事なのでは？

